

新・21世紀への道 <その3>

ホタルを介した地域との取り組み

開発コンサルタントの一員として、海外の農業開発に係わって 30 数年、退職後は地元宮崎に帰り、地域との係わりを深めるべく取り組みを続けてきた。

途上国での活動の多くは、地域住民やその組織との協働の重要性を前提に活動に結びつけてきた。一方で、自分の足元をみると、現職中の地元との付き合いは「俺はまだ東京で仕事だし」とか、「地元では生活時間も半端だし」とかであった。このような東京ー地元の二重生活を長年してきた。そして定年を機に地元に戻り、地域と直での係わりが始まった。はじめは色々な経験を積むことが重要かと考え、地区の公民館活動、歴史探索、以前から関係のある福祉施設での簡単なお手伝いなどから始めた。そうこうしているうちに、町内で地域おこし、自然環境を守る活動を行っている NPO の活動を知る。これまでの仕事経験から、農業や環境関連の活動なら何らかの貢献もできるかと思っていたことから、入会することにした。参加した NPO は、環境の保全、まちづくりの推進などを目的に、実際の活動としてはホタルを切り口とした活動を行っている。

実際の活動を紹介しよう。活動地域で見られるホタルは、ゲンジボタルとヒメボタルである。このうち、ゲンジボタルが生息している水辺の場所を選んで活動の場としている。水路の維持、ホタルの餌となるカワニナ繁殖、外光防除用の植栽、そしてもっとも作業量の多い水路周辺での除草・ごみ拾いをを行っている。会員自宅では、ゲンジボタルの繁殖を行い、ホタルが飛ぶ季節には、ホタル情報を HP で配信している。毎月一度の野外共同作業日を決め、あとは自由活動としている。

ホタルの繁殖活動では、親ホタルを 5 月上旬ごろに捕獲・産卵させる。6 月中旬に孵化後、カワニナを餌に生育を促し、2 月頃に幼虫を放流し、4 月下旬ごろから羽化させる、つまりホタルが飛ぶようになる取り組みである。現在はホタルを捕獲

しなくても、飼育ホタルを親として繁殖できるようになった。しかし、技術が未熟で、年間 20 匹程度しか羽化幼虫を確保できず、放流できるには至っていない。将来は、町の観光施設である城跡のお堀にホタルを放流し、みんなが憩える場にしたいと仲間たちと思っている。このような活動がまだ町内で認識度の低い我々の活動をもっと住民にも広げていけるようになると期待している。



NPO の仲間



ホタルの羽化装置

私の参加当時、個人活動で行われていた NPO も、6 年目にはいりメンバーも徐々に増えて 5 人の仲間となっている。個人意思を尊重し、自由な時間での参加を確保するため、無理をしない、強要しないを基本に参加者を募っている。地域内の他の環境保全グループとは、それぞれの独自性や切磋琢磨を保証しながら協力関係を築きたいと思っている。

地元に戻って 6 年ほど過ぎ、徐々に地域生活なじんできている一方で、なんとなくしっくりいかない感もある。40 年以上地元を離れていると、当たり前と思っていた田舎特有の濃厚な付き合い方にどこことなく馴染めない自分を時々感じる。田舎特有の人づきあいは経済や文化に大きく絡みついて、地域社会を成り立たせている。他方「田舎暮らし」や「リモートワーク」という言葉をよく聞くようになり、都会と地方の距離感は少なくなっている。実際、私自身も退社前 10 年ほどは、国内業務の半分は地元での作業で過ごした。地方在住のままの仕事の間口が広がれば、地方特有の付き合い方も変化して、地方と都会の立ち位置も変わっていく時代のような気がしている。